



英語略号

理事長 森 勉

昭和25年6月25日朝鮮戦争が勃発、マッカーサー元帥は日本占領軍を朝鮮半島に派兵、その代替として7万5千人の警察予備隊等を編成させた。昭和27年4月28日サンフランシスコ講和条約が発効し主権を回復したわが国は10月15日保安隊に改編、昭和29年7月1日陸・海・空自衛隊を創隊した。敗戦直後のしかも朝鮮戦争という混乱した時代背景の中、自衛隊には米軍の編成・装備・戦術等が導入され入隊した誇り高き元日本軍関係者等により部隊の編制、教育訓練等の隊務が明治維新の和魂洋才ならぬ和魂米才で運営された。

昭和40年代後半、弘前39 i Rの小銃小隊長であった私は岩木山山麓の小さな演習場で「LD通過0600:」という攻撃命令を下達していた。i Rは普通科連隊、LDは攻撃開始線の『英語略号』であるが、よそ者の私には時々理解できない津軽弁を話す小隊員約20名はその意味を良く理解して行動していた。又米軍供与の小銃はM1ライフル、国産の小銃は64式小銃と呼称し、勿論紀元歴と西暦の違いはあるが日本陸

軍のしきたりを踏襲していた。部隊名・戦術用語・装備名等の『英語略号』が陸自の業界用語として違和感なく使用されており、まさに和米折衷が陸自のDNAとなっていた。

最後の砦としてわが国の平和と独立を守ることのみを考え、陸自は海・空自に比較し極めてローカルな組織であったが、冷戦の緊張の高まりとともに日米同盟強化のため連隊レベル以下の実動訓練や軍団レベルのCPX（指揮所訓練）等の日米共同訓練が日常的に行われるようになった。冷戦終了後は国際貢献活動等としてカンボジアやイラク等海外に派遣されることが常態化した。ローカルな陸自がグローバルな共同訓練や海外派遣を一人の犠牲者もなく比較的円滑に実施することが出来たのは、『英語略号』の使用にみられるように創隊の経緯が和魂米才・和米折衷であったからではなからうか。

日米同盟強化のためには陸自のDNA化した和魂米才・和米折衷による相互理解はもとより、お互いに汗と血を流す覚悟による揺るぎない信頼関係の構築が重要である。更に自分の国は自分で守るといふ日本民族の誇りと決意が同盟の礎であることも銘記しなければならぬ。韓国において米軍の韓国軍に対する戦時指揮権が議論になっているが、わが国における日米連合作戦の指揮関係は世界にも稀な指揮関係の無い「共同」であることに着目すべきである。